

(六) 競技の嗜み

郊外まで出遊するのは、勿論男子であるが、女子は又室内に在つて、いろいろの競技に耽つた。それは先づ歌合・繪合から、扇合・雙紙合・撫子合・菖蒲の根合などをして、寄り合ては其の巧拙や意匠の深淺を競うて樂しむ。唯に歌の秀でたり繪のすぐれたなどといふばかりでなく、歌を書く紙の重ねの色や、扇・雙紙などなら、それらを載せる臺、即ち洲濱といふ器具にまで、種々趣向を施し、意匠の眼を盡すのである。中にも薫物合などになつては、薫香薬の配剤調合の如何によつて、其の香をりの優劣を競ふのだが、目で見たり耳で聞いたりする外に、趣味が鼻にまで及んでゐるとは、何と進んだものではないが。まだ此様の類は幾らもあるが、餘り長くなるから、此の位で止めて置かう。

要するに、平安朝貴族の男女は、如上のたしなみ色々の素養があつて、趣味を解し風雅の心に富んでゐた。今の流行語でいふと、全く趣味に生きてゐた人達であらう。

Wise and Otherwise.

Friend (to professor, whose lecture, "How to Stop the war," has just concluded):

"Congratulate you, old man-went splendidly. at one time I was rather anxious for you." Professor:

"Thanks, but I don't know why you should have been concerned for me."

Friend: "Well, a rumor did go round the room that the war would be over before your lecture."

(Punch.)

倭繪につきて

下村三四吉

本誌編輯の方から繪畫に關係した寄稿を願ひたいとの依頼があつたが、私は美術上の事には極めて不案内であるから、別に思はしい題目もない。但、近來我が國の繪畫界に古畫の描法を活用する傾向が段々現はれて、倭繪や南畫中などの手法を攝取消化した優秀な作品も出来るやうになつたのに因んで、こゝには倭繪を歴史上から見て、その起原・發達・特質及び沿革の概略について記して見たいと思ふ。然し、特に研究をしたといふほどの事もないから、固より精細を悉すこともできず、また何等の創見・新説もなく、たゞ斯道先覺の所説の一斑を紹介するに過ぎぬ。我が國の繪畫の沿革を知る上に幾分にても参考となるならば仕合である。

(一) 唐風の日本化

推古時代以後、我が國藝術の目覺しい發達は、主として支那藝術の感化によるので、多くは其模倣に過ぎなかつた事は、今更ことごとく述べる必要もない。たゞ藝術のみに止まらず、一體に支那文化の模倣は、平安時代の初期までは絶えず行はれた。然るに、遣唐史廢止以後に及んでは、文化の趨向も追々と變化する氣運を生じた。即ち、從來唐朝から盛んに輸入せられた諸般の事物は次第に我が國人に咀嚼消化せられ、彼の模倣のみに甘んせずして、一種の國風を化成し獨造の發展を遂げるやうになつたのである。奈良時代の

末頃から平安時代の初頃にかけて段々に發達した假名は漢字より奪胎した最も巧妙な日本化である。義字は化して音字となり、字體は極めて簡略となり、また字數も僅少で用を便せられるやうになつた。この假名を用ひて國人の思想・感情を表出することは、延喜時代以後、次第に盛んになり、所謂和文(國文)は政治上に於ける藤原氏勢力の増進と相伴つて非常な發達を遂げた。和歌の進歩と流行とは言ふまでもない。書風もまた一變して、道風・行成以後は、筆づかひ頗る流暢にして豐腴溫雅なる特徴を帶び、所謂和様の起源を開いた。建築に、彫刻に、繪畫にその他諸種の工藝・技術に至るまで、すべて日本化の影響を被ふらぬものはなかつた。本篇の題目たる倭繪(或は和繪・大和繪・和畫・大和畫などともかく)の起つたのも、かかる氣運・境遇の裡に養成せられた一現象に外ならぬのである。

(二) 倭繪と唐繪と

倭繪といふ名稱は唐繪に對してつけたのである。唐繪は唐土の景色人物等を彼れより傳來の手法によつて描いたものをいふので、即ちその題目も技巧も唐風を模倣したものである。これに反して、倭繪は我が國の自然とか人事とかを寫し出し、その手法に於ても一種の新しい風をそなへたものをいふのである。但、平安時代の物語などに見えて居る倭繪と唐繪とが、すべて、一は純日本的手法で描いた繪畫であり、他は全く支那傳來の手法で描いた繪畫であるばかりはいはれないで、兩者の名稱の區別は手法上から出來たのではなく、題材から區別されたのだとすべき場合も少くない。然し、繪畫史上でこの兩者を對照するには題材のみによらずして、寧ろ手法上から區別を立てるのが適當であらう。要するに、倭繪の起つた初期には重に支那傳來の手法によつて日本の事物を描いて居たのが、段々發達して、その手法上にも一種清新の風を創出する

に至つたのであるから、完全な意味の倭繪は、やはり單に繪畫の内容ばかりでなく、その技巧をも日本化したものといふべきである。日本の自然とか社會の風俗習慣とかは支那の其等とは大に違つて居るから、日本の風景や生活を寫し出さうとすれば、支那傳來の手法そのまゝのみでは、能く情がうつらない。どうしても一層軽快なまた優美温雅な技巧が工夫せられねばならぬ。倭繪の新しい手法はかかる必要から生じたのである。固より倭繪とても唐繪に基ついたものではあるが、次第に日本化して、特色を有するまでに發達を遂げたのである。それ故、倭繪は、唐繪に對しては、所謂一種の新派である。當時の繪畫の名匠は唐繪以外に新機軸を出して、和風の自然人事を描き、社會の人心に投じ、大に賞玩せられたが、凡庸の畫工は依然として唐風の舊様を守り、傳來粉本を模倣するに過ぎなかつた。『源氏物語』に「ふるき繪」は唐繪をいひ、「あたらしき繪」は倭繪を指したのであらう。また『枕草子』に、ないがしろなるものゝ處に「むかし覺えてふようなる物、からゑの屏風のおもてそこなはれたる」とあるのも、唐繪の屏風が流行後れのものであるといふ意味と思はれる。

(三) 倭繪の起源

倭繪の手法の或る部分は、その起源を遠く推古時代の玉蟲厨子の臺座の畫、稍下つては奈良時代の過去現在因果經の畫または鳥毛立女屏風の畫などにも求められるか、前にも述べた通りに、延喜時代以前は支那風の繪畫が専ら行はれて居つたのであるから、此等は後來の倭繪の手法に類似したものが幾分か含まれて居るといふに過ぎぬ。從つて、倭繪の起源は、大凡延喜天曆時代頃に在るとするのが適當であらう。平安時代でもその初期には、信仰禮拜の目的の宗教畫が重に行はれて、賞玩的繪畫は餘り見られない。且能畫者は割

合に僧侶に多く、宗教畫の粉本は唐土傳來のもののみであつたから、倭繪といふべきものはまだ發生しなかつたと思はれる。然るに、延喜以後所謂藤原氏專權時代に入ると、華奢の世風が益々増進し、大に賞玩的繪畫の發達を促すこととなつた。從つて先づ屏風或は障子の畫の需要が著しく弘まつた。その畫の題目は、勿論種類が多かつたが、數例を擧げると、『今昔物語』に「延喜天皇、御子の宮の御著袴の料に御屏風を爲させ給て其の色紙形に……小野道風と云手書を以て令書給、……春の帖に、櫻の花の榮たる所に女車の山路行たる繪を書たる所、云々」であり、また『古今集』等の歌の詞書に「水のほどりに梅の花さきたるかた」、「あれたる宿に人きて花見たるかた」、「竹に雪のふりたるかたある所」、「人の家に松のもとより泉出でたり」「淀のわたりすぐる人ある所にほとゝぎすかける」、「網代にもみぢ多くよれる所」、「飛鳥川」、「八月十五夜前栽うゑたる所」、「菊をもてあそぶ家ある所」、「志賀の山越につばさうぞくしたる女ども、紅葉などある所」などあるのが、それであつて、その一二を除く外は、何れも延喜・天曆時代のものに係る。此等の畫題によつて、その畫の手法の如何は勿論わからぬが、多くは日本的景物を描いたものであるといふことは大概想像せられる。現に淀とか飛鳥川とか志賀など、かその地名を指定したものさへある。日本的な景物を描くことが多くなれば、従て手法の上にも漸次に唐風を變化して行くやうになるのは自然の趨向である。延喜時代の畫界の大家巨勢金岡は、その遺作として十分に信すべきものは一もないのに、畫風の如何を確には知ることができぬが、幾分か從來の唐繪の風を日本化して一種の新調を創め出したのであらうと考へられて居る。

(次號續掲)

(24)

衣 服 の 話

(大正六年七月廿一日東京文科會員會合の際における講演の大要)

菅 原 教 造

衣服はいつたい寒暑いづれかの爲のものである。それで之に熱帶式、準熱帶式及び北方式の區別をするが温帶といふ様な中間の場合の衣服は認めないのである。熱帶では衣服と云つては用ゐない、只だ帶の様な物を巻きつけるので、今日印度人にみる所である。準熱帶では風呂敷の様なものを巻いてゐる。それが北方へ來ると身體の形通りの物を着けるので、所謂洋服の如き、大工・左官の仕事着の如きこれである。

衣服發達の順。人類としては衣服は熱帶式、準熱帶式、それから北方式と次第に進化して來た。之は人類が熱帶を故郷に持つ故である。また地球の水時代と氷時代との間に極めて温暖な時代があつたが、今日西班牙のアルペラクループの洞穴中の壁畫を當時の風俗畫と稱してゐる。實に二万年前のことだが、之に就いて見ると男子は裸體だが女子は上半身に衣服を着けてゐる、即ち熱國に於ける衣服であることは確かである。同時に人類が此時既に裝飾的に衣服を用ひてゐることが察せられる。しかしかうゆう遠い時代のことが今日の参考では無い、吾人の今日の材料は準熱帶文明國の衣服なのである。それには東洋では印度、西洋ではギリシヤ、ローマが最い、材料を與へて呉れる。エジプト、古代ローマは前者程明瞭でないがそれでも繪畫形刻又は歴史等に依つて研究することが出來ないことは無い。それも推定に過ぎないけれど。ギリシヤ、ローマ